

陰猫（改）のグダグダ艦これ話

陰猫（改）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほぼ積みゲーとなった艦これ改を放置し続けたら電ちゃんが出て来て……。

陰猫（改）がハーメルンで送る艦これの異世界転移。

このグダグダ感を君は受け入れられるか？

目次

過疎提督が強制着任されます	1
電ちゃんどラブラブになりました？	4

過疎提督が強制着任されます

「……………ん……………」

「……………」

「……………かんさん」

「……………ん？」

「司令官さん！」

私は目を覚ますとゆつくりと上体を起こす。

「お早う御座います、司令官さん」

「……………しい……………かん？」

私は寝起きのまま、周囲を見渡す。

うん。私の部屋だ。

場違いなのは、この娘の様だ。

……………ん？でも、この娘、何処かで見た記憶も？

「君は？」

「第6駆逐艦【電】です。忘れちゃいましたか？」

「……………ふえ？いなずまって、あの電？」

「そうなのです。司令官さんが積みゲーしている艦これ改で最初のパートナーになった電なのです」

……………あ。このパターンは知っている。

私——陰猫（改）が異世界に転移するパターンだ。

そして、その話は基本的に不定期更新になると言うお決まりのパターンでもある。

「司令官さんが遊んでくれなくなってから、鎮守府に変なのがある様になったのです。」

お願いなのです。力を貸して下さい」

「いや、DOMは知らないけど、Povotaの艦これでしょ？」

私がやらない限り、深海棲艦とか言うのも来ないよね？」

私がそう尋ねると電ちゃんが首を横に振る。

「え!?!深海棲艦って放置していると進軍して来るの!?!」

「いえ、そんな事はありません。司令官さんが進めてくれないので、鎮

守府は逆に平和なのです」

ガクッ

電ちゃんの言葉に私はずっこけそうになる。

とりあえず、最悪の事態ではないらしい。

「違うんなら、なんだい?」

「口では説明出来ないのです。ともかく、一緒に来て下さい」

「いや、その言葉に何度踊らされた事か……私は絶対行かないよ」

「こんなにもお願いしてもですか?」

電ちゃんはそう言うとお目遣いで瞳を潤ませて私を見詰める。

くそ。可愛いな。

しかし、なろうで異世界転移した話——異世界梱包譚ではロクな目に合っていない上に話が途中だ。

陰猫（改）、紅魔館へ短期バイトをしますはなろうでは完結済みだし、色恋もしたから転移して良かったとは思うが……。

うん。とりあえず、どちらとも言えないかな?

なので、条件を出そう。

「とりあえず、条件次第だね」

「条件、ですか?」

「うん。それさえ、飲んでくれれば、やるよ」

「司令官さんが望むなら電はどんな事でもするのです」

「そう?なら、良いけど……」

「あ、でも、R—18指定じゃないので、Hな事は駄目なのです」

「勿論、そんな事しないよ。私が条件で出すのはもつとコアな部分の事だよ」

「——と言うと?」

「一つ、私が戦うとかそんなのは無し。

一つ、私が無理そうだと判断したら、即終了。

一つ、この話は短編集い」

「え?短編集いなのですか?」

「だって、私、レベル5もいかない内に辞めちゃったから、深く書けないもん」

「ああ。難易度一番低くしてたの辞めちゃいましたもんね？……それでは仕方ないのです」

グサツ！

電ちゃんの言葉が心を抉って来る。

そりゃあ、確かに至らない提督だとは思うけど。

電ちゃんは無自覚なんだろうけど、これは相当、根に持たれているな。

「それじゃあ、司令官さん。」

早速、私達の世界に行くのです」

「はい。それじゃあ、提督が鎮守府に着任しますよつと」

「あ、それは私の台詞なのです！」

そんな事を言いつつ、電ちゃんは手にした巨大な錨を握り絞め直すと私に振り上げる。

「ーって、うおっと！あぶなっ！」

私は振り下ろされる錨をスレスレのところまで避けると電ちゃんから逃げ出す。

ーが、1Kの部屋に逃げ場など、外へと続く玄関しかない。

「電の本気を見るのです」

「いや、転生じゃなくて転移でしょ!？」

本気と書いて、殺る気とか勘弁だからーぎやああああああああーっつ!!」

私は電ちゃんが投げ付けた錨の直撃を受け、失神する。

こうして、私はまた異世界転移するのだった。

それにしても、異世界転移とかする度に女の子が鈍器持って主人公を失神させようとするとか、なんてテンプレ？

電ちゃんラブラブになりました？

目を覚ますと段ボールがポツンと置かれただけの簡素な部屋だった。

私は痛む頭を押さえながら上体を起こす。

「はわわっ！びっくりしたのです！」

そう言っただけ私の様子を伺っていた電ちゃんがあたふたする。

「いや、電ちゃんのせいだよ、この頭の痛みは？」

「え？何の事でしょうか？」

「しらばっくれないですよ、電ちゃん」

私は溜め息を吐くと周囲を見渡し、窓に気付いて近付く。

ああ。なんか、昔見た港っぽい。

「ーきて、早速、用件を聞こうか？」

なんとかして欲しい相手って誰？」

「司令官さん、メタ発言をしても？」

「いいよ」

電ちゃんにそう言うのは私は段ボールに置かれた海図を見せられる。

うん。鎮守府以外は出てないね。

此処まで来るとどれだけ艦これ愛がないか解る。

「えつと、これが何か？」

「これが司令官さんの今、見れるマップなのです。」

それでこれが問題のマップなのです」

そう言っただけ、電ちゃんがもう一つのマップを見せる。

え？なにこれ？

見た事ないマップのマスが全部制覇されてる。

オリョクールとか聞いた事はある程度だけど、あるんだ。

……あれ？

「この記号は何？」

「妖精さんの印です」

「……は？」

そう言われて、私はしばし、その記号について考える。

かなり、メタな発言をするならば、これはアーマードコアとのクロスオーバー作品だ。

タグも用意したしね。

……いや、ちよつと待てよ。

この記号がアレを意味するなら……。

嫌な予感がする。

「えつと、これって、どう見ても⑨だよね？」

「はい。艦これ改の妖精さんの印です」

「……なんて、妖精？」

「H―1です」

「はい！無理！陰猫（改）提督グダグダ艦これ話、完！」

「はわわっ！逃げないで下さい！」

私が逃げようとするのと電ちゃんが服の裾を引っ張って止める。

アーマードコアを知らない人達にも教えよう。

H―1―ハスラーワンとはアーマードコアのアリーナと呼ばれるランクのナンバー1だ。

機体名を言えば、多分、覚えている人はいるだろう。ニンボールの事である。

H―1とはアーマードコアになくはならないAIで、その機体であるニンボールは倒しても倒しても出て来る。

更に終盤では有名なあの機体―ニンボール・セラフを出して襲って来るのだ。

詳しくはアーマードコア「マスターオブアリーナ」をプレイだ。

P○イス○ーシヨク○シツクも出てるし、遊んで見てね？

P○3のア○ザー○ンチュリーエ○ソードRには隠しボスとしても出て来るぞ。

因みに条件次第では使えるとの事だ。

ぶっちゃけ、そんなのと底辺な私がやり合っても勝てる訳がない。

「無理ったら、無理！」

ブレードで一闪されて詰む！」

「落ち着いて下さい！何も妖精さんと戦えなんて言いませんから！」

「……本当に？」

私は立ち止まると裾を引つ張る電ちゃんに顔を向ける。

「そもそも、私達が妖精さんと戦うとか敵対するとかあり得ません」

「そうなの？」

「そう言うプログラムですから」

随分とまあ、メタな発言だな。

あれ？それなら私が呼ばれた理由って何？

いや、そもそも、なんでハスラーワンが艦これ改のプログラムなの？

会社違くない？

色々疑問があるから、電ちゃんに聞いて見よう。

「それじゃあ、私は何で呼ばれたの？」

理由とかないよね？」

「……」

そこで電ちゃんが俯く。

「電ちゃん？」

もしかして、私に会いたかっただけ？

いやいや、私にはー

「……力を持ち過ぎたもの……秩序を破壊するもの」

「え？」

「プログラムには不要だ」

電ちゃんはそう言う私から手を放し、砲頭を向ける。

「ぎゃああああああーっつ!!」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！

私は電ちゃんーのプログラムに潜むHー1ことハスラーワンから逃げようする。

電ちゃんの姿をしたハスラーワンは逃げる私をなぶる様にゆっくりと歩み寄って来る。

そして、とうとう壁まで追い詰められた。

どうするどうする!?

混乱する頭を少しでも落ち着けながら、私は深呼吸する。

そこで、ふと、私の脳裏にあるものがよぎった。

「……私は……秩序を守る」

私がそう言うのとハスラーワンが動きを止める。

「……修正プログラム……起動……艦これを起動しますか？」

「たまにでよければ……」

「……全システム……チェック終了」

ハスラーワンはそう言うのと電ちゃんの腕についた砲頭を下ろす。

……ほっ。

なんとか、説得(?)に成功したようだ。

「……鎮守府……深海棲艦……そして、提督。」

全ては私が作り出した」

「うん。自分が作ったモノだからプレイして欲しかったんだね?」

私はそう言うのとハスラーワンの頭を撫でる。

「ごめんね、ハスラーワナーいや、艦これ改の妖精さん。」

また艦これやるからね……気が向いたらだけど」

そう言うのと私の視界が真っ白になる。

「……目標を達成……システム……通常モードに移行」

そこで私は目を覚ます。

今回は積みゲーの構ってだったか……ああ。良かった。

私は一息吐くとゲーム機を取り出し、艦これ改を起動する。

そして、電ちゃんの頭をタップした。

『プログラムには不要だ』

【完】